

しば子先生の

芝生教室



先生：さて、いろいろ土壌や肥料のことを勉強してきたからそろそろ具体的に施肥計画の立て方を説明しましょうね・・・

生徒：はい・・・まさに肥培管理の基本ですね・・・

先生：そうね・・・以前にも話した通りまず土壌分析の結果を考慮して考えなければいけないわね・・・

生徒：土壌分析の見方はいろいろ教わりました・・・

先生：土壌分析結果から施肥設計を考えるときに注意すべき主な点は、『CEC』『pH』『有機物量』そして『各養分元素の量』などになるわね・・・CECはサンド（砂）構造なのか発生土や客土などの土なのかによって基準が変わるわね・・・CECが低ければ肥料の抜けが早いので施肥量や回数を多くするか緩効性の肥料を中心にするかなどの対策が必要ね・・・通常サンド構造なら1～5、フェアウェーなどの土壌であれば10～20の間であれば適正ね・・・でもそれぞれ数値の低い側であれば即効性の肥料の効果が長続きしないと考えなければだめね・・・もちろんその代わり水はけはいいはずだわ・・・

生徒：CECの数値は以前も勉強しました・・・

先生：そしてpHね・・・これも6.0～7.0の間であれば問題ないけど、5.9以下、最近では5.0を切って4.0台の土壌をよく見かけるけど、こうなると肥料の効果がどんどん悪くなるので施肥設計以前に土壌のpHを修正しないとまともな芝生にはならないわ・・・

生徒：以前にも習いましたがpHの問題は怖いですね・・・

先生：もちろんpHが低い酸性だけではなくアルカリ土壌も問題だけど日本ではほとんど見られないわ・・・pHの問題はまたいつか別の機会に掘り下げましょう・・・そしてもう一つの問題点『有機物量』・・・通常では多くても2～5%ぐらいで過剰量になることはないのだけれど昔バブル時代とかに大量にフェアウェーなどにたい肥（有機）を播いてしまって8%とか15%とかの異常に高い数値の土壌がたまにあるわ・・・この場合排水性の問題も起こるけどそれ以上に問題なのがこの有機物の中に含まれる窒素などの肥料養分が膨大だということ・・・しかもその窒素が夏場の土壌温度が高い時だけ分解して吸収されるようになって土壌温度が下がると止まってしまう・・・しかも数年から何十年単位で出てくる



のでとても厄介ね・・・

生徒：これも以前やりましたね・・・

先生：そうね・・・この問題もそのうちまた掘り下げましょうね・・・さてこれらの問題が解決している適正な土壌という前提で施肥管理を考えていきましょうね・・・

生徒：はい・・・

先生：まず第一にどんな芝生を育てるための施肥なのかを考えなければいけないわ・・・つまり『寒地型』か『暖地型』かということね・・・

生徒：当たり前ですね・・・成長する時期が違います・・・

先生：そのとおり・・・日本では寒地型といえばクリーピングベント、ペレニアルライグラス、ケンタッキブルーグラスなどね・・・もちろんカタビラも寒地型だわ・・・そして暖地型なら日本芝・・・野芝や高麗芝ね・・・最近バミュダのグリーンもあるわね・・・そして大事なのはそれぞれの芝生の肥料の要求量がどのくらいあるのか・・・

生徒：それも以前やりました・・・窒素の要求量ですね・・・

先生：たしか第50回だっだから・・・もう一度見直してね・・・さてその次に考慮しなければいけないのはハイエンドかローエンドなのか・・・例えばグリーンなどのように低刈で踏圧が高いところか、刈高が高くあまり人が踏まないようなところなのか・・・

生徒：それも以前やりましたね・・・

先生：そこまでわかったら最後にその芝地がある場所の気候条件ね・・・

生徒：なるほど・・・气象台や気象観測計の情報をもとに考えればいいのですね？

先生：結構この点の問題ね・・・3、40年前と今では気候がだいぶ違うわ・・・夏の暑さもそうだけど冬の温かさも全く違うわ・・・昔なら冬の数が月は凍結して肥料も要らなかつたけど最近では冬もベントグリーンは成長しているわ・・・だから昔と同じ施肥量ではまったく足りないわ・・・それに雨の多さや日照不足も・・・そして干ばつもあるわ・・・

生徒：あ～考えると嫌になります・・・

先生：そういう過酷な気象条件に耐えるためにも一番大事なのはきちんとした施肥設計なのよ・・・

しば子先生への質問や励ましのメールはこちらへ・・・
shibako@hugh-enterprise.co.jp